

〔巻頭言〕

論文の公表をサポートすること

成熟期看護学領域 田村正枝

本学の紀要は2001年3月に第1巻が発行されてから年ごとに1巻ずつ、途中から年間2冊発行されている年もあるが、本年度末には14巻を刊行することになる。論文の種類からみると、本学の紀要は原著よりも教育実践報告を含む研究報告が大きな割合を占めており、これは大学草創期には各教員が自分の教育実践を振り返り評価を行う意味で教育実践報告が多いこととうなずける。従来、紀要における原著論文は各巻に1~2本であったが、2013年からは修士論文の投稿が認められることになり一挙に原著論文が7本となった。その中に修士論文4本が原著として掲載されたことは、紀要に大きな変化をもたらしたと思われる。本学博士前期課程では修士論文として看護実践研究に取り組んでおり、看護実践研究がどのようなものであり、その意義を世に問う意味では、修士論文の公表の場として今のところは紀要がその役割を担っていくのが妥当であると考えられる。

本学に赴任してから7年、この間継続して紀要の編集に携わる機会を頂いてきた。委員としてのコメントを記す役割は別として、まだ、著者である研究者以外には誰も目にしていないできたての論文を一番先に読ませていただくことほどわくわくすることはない。編集者の一員として、著者の投稿論文を受け取り、投稿規定に則って記載されているかを確認し、論文ごとに査読者を選定して、査読を依頼し、編集委員としてのコメントを加えて査読結果を著者に返す。査読結果によってこの作業が繰り返されることになる。

投稿された論文は研究計画を立てる時から、データ収集や結果をまとめる段階でもまた、論文としてまとめる時にも多くの苦労による成果物であることを考えて、1つ1つ丁寧に投稿者の意向を尊重して読んでいく。論文の良さは何処にあるのか、また、どこを修正すればより質が高く、読者に理解されやすい論文になるか考えて読み、査読結果を踏まえて委員としてのコメントを加え、

再度修正して投稿してもらえるように著者に返している。これは査読者の方と重なる部分も多いと思われる。投稿論文は、査読を経て研究論文として一定のレベルが保証された論文とされ、また査読で指摘された内容は著者にとっては研究の適性を考える機会となり、研究方法や論文の書き方が精練されていくことになる。査読を受けることは、審査されることであり、あまり心地よいものではないが、著者にとっては貴重な学習の機会ととらえて挑戦してほしい。

投稿論文の公表をサポートする中で、最近、気になることがある。論文の査読を行う以前に、論文の形式や表現、文法的に誤った表現、誤字・脱字などが多い論文に出会うことである。このような論文に対してどこまで指摘すべきか悩まされる。そして指摘し始めると際限がなくなり、多くのエネルギーが必要となり、本来の本質である内容の確認にまで到達できなくなることがある。これは著者にとっても良い査読を受ける機会を奪うことになりかねない。論文執筆に慣れていないと推測される論文に対して、教育的査読を行うことは、委員の仕事の一端として否定するつもりはないが、これは一体誰が行うことが一番良いのであろうかと思う。多くの論文には、複数名の共著者が記載されている。世界医学雑誌編集者協会の方針書（2007）によると、原稿の最終版には、全著者の承認が必要となるとある。論文を投稿する前に筆頭著者に全ての責任を負わせるのではなく、共著者の目を通すことで、このようなことを少なくすることが、より良い査読を受けることにつながるのではないだろうか。

良い論文を公表するためには、著者、査読者、編集者の協働にあると思う。

文献

世界医学雑誌編集者協会(WAME). (2007). 方針書.
<http://jams.med.or.jp/wame.html>